

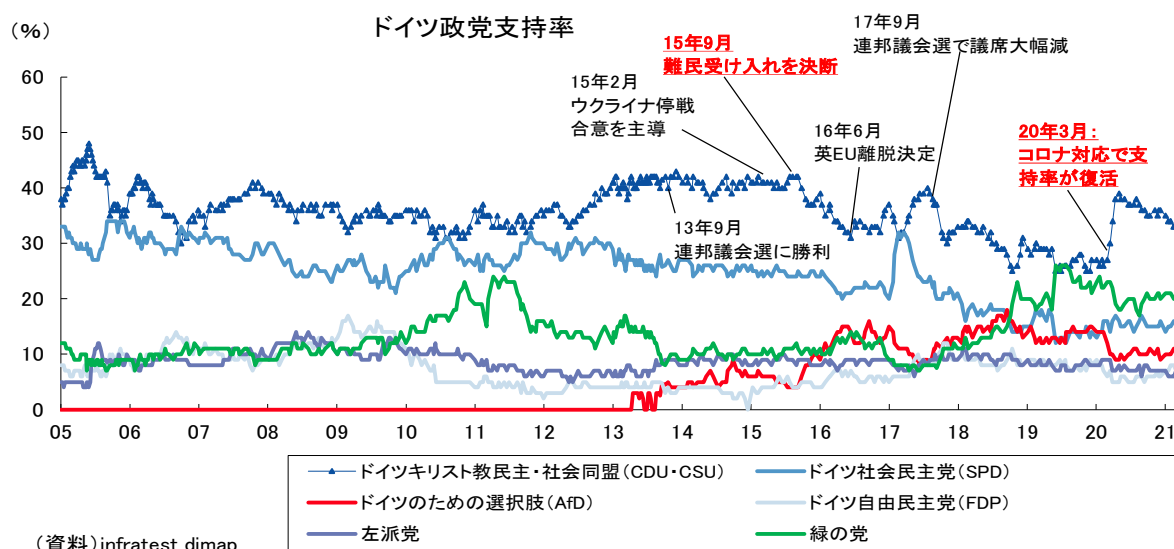
みずほマーケット・トピック(2021 年 4 月 6 日)

暗雲垂れ込めるアフターメルケルのドイツ政治

メルケル独首相の所属政党・キリスト教民主同盟(CDU)の支持率が急落している。9 月の連邦議会選挙を経て、CDU がメルケル首相引退と共に下野するとのリスクも否めず。科学者としての客観的な対応が高評価を得た 2020 年から状況は一変している。CDU の代わりに支持率の受け皿となったのは緑の党、社会民主党(SPD)、自由民主党(FDP)。とりわけ緑の党の支持率は 20%を突破しており、「緑の党+SPD+FDP」の組み合わせならば、現在可能性が高いと言われる「CDU+緑の党」に肉薄する。現在の連立政権である「CDU+SPD」は維持されない公算で、いずれにせよ「緑の党がキーとなる」というのが 9 月総選挙の見所に。次期首相は今のところ見えない。CDU のラシェット氏、CSU のゼーダー氏、緑の党党首、SPD のショルツ氏などの名前が挙がりやすい。世界的な環境保護機運の高まりを思えば、環境政党の政治家が大国ドイツを率いるという話題は注目されようが、国政経験の無さは不安。誰がなってもメルケル首相という稀代の政治家の後任としては小粒感が否めず、EU をけん引できるリーダーとしては心許ない。

～CDU、1 年ぶりの低支持率に～

本欄 2021 年 3 月 25 日号『ドイツ州議会選挙に見る「移民から環境へ」のシフト』では、州議会選挙で連敗を喫したメルケル独首相の所属政党・キリスト教民主同盟(CDU)が支持率を落としており、9 月の連邦議会選挙を経て、CDU がメルケル首相引退と共に下野するのではないかとその可能性を指摘した。州議会選挙後を終えて 3 週間が経過し、その結果を踏まえた各種世論調査が公表されているが、CDU 並びに姉妹政党であるキリスト教社会同盟(CSU)の支持率は悲惨な状況にまで落ち込んでいる。4 月 1 日、公共放送 ARD が発表した調査によれば、「メルケル政権の仕事ぶりに満足している」との回答は 1 年前の 63%から 35%へほぼ半減している。以下の図は infratest dimap



社が調査するドイツ主要政党の支持率推移を見たものだが、4 月 1 日の調査結果によれば CDU の支持率は 27%と遂に 30%を割り込んでいる。30%を割り込むのは 2020 年 3 月以来だ。

近年の傾向を振り返っておくと、CDU の支持率はメルケル首相が難民の無制限受け入れを決断した 2015 年 9 月以降、基本的に低下傾向にあった。その決断自体がメルケル首相の政治家引退の遠因にもなったことを周知の通りである。しかし、その低下傾向が底打ちし、V 字回復し始めたのが 1 年前の 2020 年 3 月である。当時、客観的なデータと共に行動制限を要請する姿が「科学者ならではの冷静かつ的確な判断」をもたらしていると国内外で称賛され、元より定評のある国民への語りかけも相まってメルケル復活を持て囃す声が多くなった。

しかし、先週の本欄でも紹介したように、今年のイースターを巡る行動制限に関しては、一転して国民の不評を買い、朝令暮改の末に謝罪を強いられるという対照的な展開に陥っている。事前のコミュニケーション不足ということもありそうだが、ドイツに限らず、一律の行動制限という施策に関してもう社会が許容できなくなっているのではないと思われる。特定国にワクチン供給が集中する中、行動制限を強いられつつ、ワクチンの打てない国の人々は当然、「政治家は何をやっているのだ」との思いを抱きやすいだろう。日本も同様のはずだ。もちろん、3 月の州議会選挙連敗は現職の州首相が強かったという事情のほか、CDU 議員によりスキャンダルなどの影響が大きそうであり、メルケル首相やラシェット党首に直接的な影響があるとは言えないが、もはや「9 月総選挙で CDU が下野する」は必ずしも可能性の低いシナリオとは言えなくなっているように見える。

～「緑の党がキーとなる」のは濃厚～

では CDU の代わりに支持率の受け皿となったのはどの政党か。上記の infratest dimap 社の調査によれば、過去 1 年で CDU の支持率がピークだったのは 2020 年 5 月初頭であり、当時は 39%あった。上述したように、現在はそこから▲12%ポイント低下した 27%まで下がっている。この 12%ポイントのうち 4%ポイントずつ(計 8%ポイント)が環境政党である緑の党(中道左派)と自由民主党(FDP、中道右派)に振られており、現在はそれぞれ 22%と 8%まで上昇している。CDU が連立を組む社会民主党(SPD)は 16%で変わっていない。極右政党として知られる「ドイツのための選択肢(AfD)」も 9%から 11%へ支持率をわずかに伸ばしているが、前頁図に示すように、旋風を巻き起こした 2017 年 9 月の総選挙を経た翌年(2018 年)には 15%以上の支持率があったことを思えば、勢いは衰えている。当時は緑の党と並ぶ新興勢力として注目されていたことを思い返すと、過去 4 年間で新勢力同士の争いはかなり濃淡がはっきりしてきたように感じられる。

もちろん、現状のまま 9 月の連邦議会選挙を迎えても CDU が第一党になるだろう。しかし、このペースで支持率が落ちれば、政権維持は難しくなる可能性も否めない。上記の infratest dimap 社の調査を用いてイメージを作ってみよう。巷では「CDU+緑の党」の連立政権を予想する声が多く、この場合は 49%(27%+22%)だ。これに対し現状の「CDU+SPD」は 43%(27%+16%)なので、もはや連立政権は現在の姿では残らない可能性が高い。一方、CDU が政権を奪われるシナリオとして「緑の党+SPD+FDP」との組み合わせも予想され、この場合、46%(22%+16%+8%)で「CDU+緑の党」と肉薄する。いずれにせよ「緑の党がキーとなる」という事実は変わりそうになく、AfD の停滞も合わせ見れば、ドイツ(というより欧州)の関心が「移民から環境へ」という変化を経験していると言えそうである。

～首相候補、いずれにせよ小粒感否めず～

メルケル首相の後継者はどうか。「CDU+緑の党」の場合、順当に行けばラシェット党首になりそうだが、ここまでの支持率低迷を踏まえ、国民人気の高いバイエルン州首相で姉妹政党 CSU のゼーダー党首に首相候補をバトンタッチして選挙を戦うという可能性はある。もちろん、連立のキーとなる緑の党から首相が選出される可能性はあるが、同党の首相候補は未定である。共同党首であるベアボック氏、ハーベック氏のいずれかが候補になりそうだが、いずれも国政経験はない。世界的な環境保護機運の高まりを思えば、環境政党の政治家が大国ドイツを率いるとなれば、その話題性は十二分にあるものの、経験値という点に照らせば、「緑の党+SPD+FDP」の連立政権ならばショルツ財務相兼副首相を選んでおく方が無難にも思われる。

いずれにせよ、メルケル首相という稀代の政治家の後任としては小粒感が否めず、EU をけん引できるリーダーとしては心許ないものになりそうである。仮に、「緑の党+SPD+FDP」で緑の党から首相が選出されるとなれば、ドイツ政治の左旋回が危惧されるところであり、緊縮財政を金科玉条の如く崇めてきた政策運営が変わるかどうかという点で期待もあるが、それ以上に政局が流動化しやすくなる不安の方が大きいと言わざるを得ない。

市場営業部・金融市場部
チーフマーケット・エコノミスト
唐鎌大輔 (TEL: 03-3242-7065)
daisuke.karakama@mizuho-bk.co.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

バックナンバーをご希望の方は以下のサイトからお取り頂くことも可能です

<http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ.html> (Archives) http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ_backnumber.html

発行年月日	過去6か月のタイトル
2021年4月5日	米3月雇用統計の読み方～長期失業者割合は上昇～
2021年4月2日	週末版(欧州で台頭するワクチン・ナショナリズム～EU 離脱を象徴するワクチン戦争～)
2021年4月1日	ラガルドECB総裁、「挑発」の真意はどこに？
2021年3月29日	リスクシナリオの点検～上下のリスクを検討する～
2021年3月26日	週末版(現状を理解するための3つのテーマ「金利」・「コロナ抑制状況」・「原油」～「需給」は小休止～)
2021年3月25日	ドイツ州議会選挙に見る「移民から環境へ」のシフト
2021年3月22日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2021年2月分)
2021年3月19日	週末版(「実質金利ゼロ」が次の節目？～ハイライトは4～6月期か？～)
2021年3月18日	FOMCレビュー～現状維持に見る強気の足音～
2021年3月16日	FOMCレビュー～ドットチャート&議長会見～
2021年3月15日	期待の米国、不安の日本～コロナ対応の明暗～
2021年3月12日	週末版(ECB政策理事会を終えて～significantly higher paceの解釈～)
2021年3月11日	ECB政策理事会レビュー～PEPPの加速を示唆へ～
2021年3月9日	年初来の為替市場から見える「今年のテーマ」
2021年3月8日	好調な米2月雇用統計にも見逃せない危うさ
2021年3月5日	週末版
2021年3月4日	英ポンド急騰の背景～経済対策、ワクチン、成長率～
2021年3月3日	米金利に連れたユーロ圏金利～ECBは容認できず～
2021年3月2日	「鏡に映った自分」に惑うFRB～前提が変わった2か月間～
2021年2月26日	週末版(米10年金利の1.60%台到達を受けて～パウエルショック～)
2021年2月25日	マネーサプライを見てインフレ語れず～パウエル公聴会～
2021年2月22日	「民間部門の貯蓄過剰」は今後の「マグマ」なのか？
2021年2月19日	週末版(ECB政策理事会議事要旨を受けて～明記された「ユーロ高反転」～)
2021年2月18日	動き始めた米実質金利への懸念～10年1.3%到達を受けて～
2021年2月16日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2021年1月分)
	アフターコロナを予感させる米国のインフレ論争
2021年2月15日	ドラギ新首相誕生について～「挙国一致」と「寄せ集め」の狭間～
2021年2月12日	週末版(下がらない実質金利とイールドスプレッドの現状～やはり気になる「米10年金利1.5%」という節目～)
2021年2月9日	円相場の需給環境～貿易均衡国という新形態～
2021年2月8日	試される「双循環」～人民元の上昇は容認されるか～
2021年2月5日	週末版(なぜユーロ圏消費者物価指数(HICP)は急騰したのか？～過性のまやかかし～)
2021年2月4日	最悪の落ち込みとなった2020年のユーロ圏経済
2021年2月2日	イスラエルリスクをどう考えるか～世界の実験室～
2021年1月29日	週末版(マイナス金利深掘りを示唆し始めたECB～その理由はどこに？～)
2021年1月27日	米10年金利はどこまで上がりそうか？
2021年1月25日	最悪となった2020年のユーロ圏物価情勢
2021年1月22日	週末版(ECB政策理事会を終えて～「次の一手」はYCC？～)
2021年1月20日	「強いドル」とは言わなかったイエレン新財務長官
2021年1月19日	直接投資減少で緩むドル/円相場の「地盤」
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年12月分)
2021年1月18日	金融市場はバイデン新政権をどう見ているのか？
2021年1月15日	週末版(ECB政策理事会議事要旨～ラガルド流が試されるのは昨年よりも今年～)
2021年1月13日	実質金利の上昇はどこまで容認されそうか？
2021年1月12日	米12月雇用統計の読み方～ヘッドラインに引きずられず～
2021年1月8日	週末版(早速乱れ始めたFRBのフォワードガイダンス～いつも通りの済し崩し～)
2021年1月7日	緊急事態宣言の再発出で強まる貯蓄という正義
2021年1月5日	遂に2%に到達した米国のインフレ期待
2021年1月4日	低金利が招く格差拡大・為替の静寂・株の喧騒
2020年12月28日	英EU「新たな関係」合意を巡るQ&A
2020年12月25日	週末版
2020年12月24日	やっぱり狭かったドル/円の値幅～3つの背景～
2020年12月23日	期待指数に薄日も差し込んできた米消費者マインド
2020年12月21日	2021年も続く「金融市場と实体经济の乖離」
2020年12月18日	週末版(為替政策報告書を受けて～垣間見える「まだ、ドル高」の本音～)
2020年12月17日	FOMCを終えて～約束された「金利差なき世界」～
2020年12月16日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年11月分)
2020年12月15日	イエレンダッシュボードで見る米雇用の現状
2020年12月14日	ドル安の裏側には何があるのか？～元、ユーロの存在～
2020年12月11日	週末版(ECB政策理事会を終えて～「中途半端」でユーロ高抑制できず～)
2020年12月10日	「イエレン次期財務長官と為替」というテーマ
2020年12月8日	前門のプレグジット、後門の次年度予算
2020年12月7日	米労働市場の抱える怖さ～長期失業者の増加～
2020年12月4日	週末版(FRBが直面するインフレ期待上昇～2021年の政策運営に影響必至か？～)
2020年12月2日	過去に類例のない物価低迷に直面するユーロ圏
2020年12月1日	実質金利とドル/円相場にまつわる議論について
2020年11月27日	週末版(緩和の「收穫減減」に触れたECB～やればやるほど意味が薄れるリスク～)
2020年11月25日	拡大し続ける实体经济と金融市場の距離感
2020年11月24日	ECBの振りかざす「2段階アプローチ」とは
2020年11月20日	週末版(「円高ではなくドル安」という葛藤～日本の政治・経済にとってのリスク～)
2020年11月18日	側近退場後のジョンソン政権とプレグジット交渉の行方
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年10月分)
2020年11月17日	日米欧三極の成長率～急落と急騰の先にあるもの～
2020年11月16日	ワクチン報道はゲームチェンジャーになったのか？
2020年11月13日	週末版
2020年11月12日	結局、解消されていないユーロ高～「量」の無力～
2020年11月11日	円高・ドル安予想を修正する必要があるのか？
2020年11月10日	アフターコロナ & アフターランプに沸く金融市場の整理
2020年11月6日	週末版
2020年10月30日	週末版(ECB政策理事会を終えて～ラガルド就任、1周年～)
2020年10月29日	ECB政策理事会レビュー～求められる緩和仕草～
2020年10月27日	中銀は環境に貢献すべきか？～ESG全盛の中で～
2020年10月26日	解せないバイデントレード～米金利とドルの逆相関～
2020年10月23日	週末版(2020年、どのような通貨が評価されているのか？～年初来の対ドル変化率を振り返って～)
2020年10月22日	続・プレグジット Q&A～首脳会議で深まった「溝」～
2020年10月20日	IMF秋季世界経済見通し改定の見るリスクシナリオ
2020年10月19日	過去最悪の米財政赤字とIMF「財政報告」
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年9月分)
2020年10月16日	週末版(この状況でも底堅いユーロ相場～IMF最新見通しでも欧米成長率格差は過去最大～)
2020年10月15日	「ミニ合意」騒動とEU首脳会議の行方